

の通信は殆ど彼の手になつたものであつた。一九三一年には印度に起つたガンジー暴動事件を通信する爲めに飛行機で出張した。一九三四年ドイツに起つたヒットラーの血の週間にも現地に出張。伊エ戦争にはイタリア軍に従軍したが、この戦争が終るとスペインの内亂、即ち「世界小戦」を現地に見る爲めに出張した。現在は U. P. 歐洲局長でありまた米國新聞界の歐洲事情通の權威でもある。自敘傳に "found No Peace" がある。

ミルズ【Mills, Hal P.】米國人。新聞記者。一九三二年の上海事變中チャイナ・プレススの記者として日本領事館係りとなつてゐたが、後ファー・イースタン・ウイメンズ・ウークリー創刊主筆となつてゐたが間もなく廢刊。娯樂物の切符賣捌業チャイナ・アミューズメント・カンパニーを創業して社主となる。

ミルズ【Mills, James A.】米國人。新聞記者。一八八三年紐育市で生れ、其所で成人した。一九〇九年 P. (米國新聞聯合社) には時の總監督 "Charles H. Daynton" 氏の秘書として入つたのであるが、後同社の記者となつた人。歐洲大戰には赤十字義勇兵となり陸軍少佐の資格でシベリヤ、ロシア本部、バルカン諸國、イタリア、フランス等に轉動したが、中途に於て一九一七年——一八年には A. P. 記者に轉じてフランス戦線に従軍、更にバルカン諸國に出張。一九二四年——二九年及び一九二九年——三〇年モスコート特派員、一九三〇年の秋には、後日伊エ戦争に敗戦されて亡命された記事をも書かねばならぬ運命となつた、エチオピア皇帝陛下の御戴冠式を報導の爲めにアヂスアベバに出張。一九三一年——三二年印度支局主任であつたが、ガンヂー氏が圓卓會議にロンドンに出張するに及んで隨行した。一九三二年——三四年には支那及び滿洲國に出張して、日本軍の熱河占據、滿洲國皇帝の御大典等を報導した。一九三四年七月にはオーストリーに在つて時の首相ドルフス暗殺事件に遭し、再びバルカン諸國を巡つて、一九三六年には再び支那に出張した。彼れは寫眞撮映にも専門家の技術を持つてゐるので、彼

れを書く記事には、必ず優れた寫眞が添加されてゐるのを常とする。その自敘傳とも云ふべきものが、"Scoop-Hunting Around the World" と題して "We Cover the World" (一九三七年) の中に編輯されてゐる。支那事變勃發當時は A. P. 通信員として東京に在つたが米國に赴き更に支那へ行つた。

ム

ムーラッド【Moorad, G. L.】米國人。新聞記者。米國ボラランドに生る。同地リンカーン・ハイスクールの卒業。オレゴン州立大學、紐育のコネル大學に學んで、新聞記者となりオレゴン・チャーターナル紙に入社。一九三二年渡支、上海のチャイナ・プレスの記者となつたが、一九三三年シャンハイ・タイムズに轉じた。

ムシル【Musil, Alois】チャシコ人。東洋學者。チェッコ學士院會員。一八六八年六月三〇日 "Rychnov (Moravia)" に生る。"Olomouc" に於て神學を學び (一八九五年神學博士となる) 一八九五年エルサレム聖書學校。一八九七年 "St. Joseph" 大學。一八九九年 "Berlin" 大學等に學びたる後、ロンドンの圖書館及博物館 "Cambridge", "Berlin" コンスタンチノープル、ウィーン等に於て研究したる後、プラグ及びウィーン大學の教授となり、聖地及びシリアに研究旅行を試み聖書上のシナイ山、出埃及記の古蹟等を研究して之を明かにした。一九一二年にはコーフレイツ河、チグリス等にも旅行した。このアラビヤ旅行より歸ると陸軍少將に任ぜられ、一九一七年には小亞細亞、シリア、パレスチン等に關係ある "Archduke Hurbert's Mission" を主宰した。主なる著書には "Arabia Petraca" (一九〇七年——一八年) "The Northern Nagazine" (一九一六年 New York) "Arabia Deserts" (一九一七年 New

York)。“The Middle Euphrates”(同上)。日本の對支政策には反對した。

ムツチヨリ【Muccioli, Marcello】伊太利人。政治經濟學者にして著述家。イタリー百科全書及びツリー

ング・クラブ等の日本關係記事編輯者。

ムラトフ【Muratoff, Paul】白系露人。露字新聞記者。一九三三年ジュール・セメノフ主筆の露字紙ウオズ

ロチッデーニエの記者として日本に派遣せられ、滿洲事變直後の日本及び滿洲に關する問題を通信した。

メ

メーボン【Maybon, Albert】佛國人。在巴里佛領印度支那經濟局調査及宣傳課、元東京外國語學校佛文學教授。一九〇三年——五年西貢の“Courrier Saigonais”主筆。一九〇六年——一二年極東問題の専門家として多數の新聞雜誌に寄稿した。一九一〇年にはビエール・ロテイ、クロード・フアール、フリップ・ペルトロー等と共に“Société Les Français d'Asie”を創立してその書記長に任ぜられた。一九二二年——一四年には殖民省及商務省の囑託となつて支那本土、雲南、廣西等を踏査旅行したが更に一九一六年には外務省より日本に派遣せられ同年一月“Maison de la presse”及び駐日佛國大使館の後援の下に佛文雜誌極東時報(“L'Information d'Extrême-Orient”)を發刊。一九一八年神田區内に佛蘭西書院と云ふ書肆を開いたが、一九二〇年にはタム紙の東京特派員となつた。この間“Société Des Amis de France”(佛蘭西同好會)を創立したが一九二一年——二三年には東京外語佛文學教授に任ぜられた。同年歸佛後は東亞の經濟事情等に關して多數の新聞雜誌に寄稿してゐるが日本及支那に關する著書も十指に餘るものがある。その主なるものは“La Japon d'Aujourd'hui”(一九二五年)。“L'Ind-

ochine Francaise (一九三一年)等である。

メーロ【Mello, Vieira de】ブラジル人。新聞記者。デアリオ・カリオカ紙の經濟記者であつたが、聯邦政府交通大臣秘書、トレス協會移民部長等に就任。

メツサウド・ペー【Messoud Bey, Zeki】トルコ人。新聞記者。政治家。スミスナのリセー大學に政治學を學びフランスに留學。歸國後官吏となつたが、辭してムルキエ大學國際法學教授となる。後代議士に選出さる。日刊新聞ハキ・ミリエツト政治社會記事主任。

メルツ【März, Dr. Josef】獨逸人。新聞記者。一八九二年ミュンヘンに生る。同大學に於て地理學を修め、後新聞記者となり極東問題を研究。“Neue Leipziger Zeitung”紙ベルリン駐在代表記者となる。

メルボルン【Melbourne, Dr. A. C. V.】濠洲人。學者・大學教授。濠洲アデレード大學卒業。ロンドン大學に留學、哲學博士となる。歸濠後一九一三年クァーンズランド大學講師となる。一九三一年日本及支那に公務を帯びて旅行、後「聯邦東洋貿易審議會」委員長に推薦さる。傍らクァーンズランド大學に於て近代史を教授。主著“Report on Australian Intercourse with Japan and China”

メンド【Mende, H. G.】英國人。新聞記者。ロイテル支那特派員として天津に駐在。英國公使館翻譯官元北平政府交通部顧問等に歴任したことがある。

メンドーサ【Mendoza, Adalberto Garcia de】メキシコ人。大學教授。一九三〇年日本見學に生團を組織して日本に旅行、日本の文化を研究し歸國後國內の各都市に講演旅行して現代日本を紹介。一九三三年滿洲事變後極東問題を論説し新聞等に寄稿して日本を支持。一九三四年日本紹介の機關として「日本及東洋研究學會」を創設。メキシコ大學哲學科教授となる。

モーア [Moort, Frederick] 米國人。著述家。一八七七年一月一七日ニュー・オルレアンスに生る。一九〇六年ハヴァード大學に學ぶ。(夫人は英國人にしてプリモウスの生れ)。“New York Times” “London Times” その他英米一流新聞の記者及び通信員となる。一九〇一年華府にロイテル代理店となり、次でロンドン、バルカン諸國、モロッコ、トルコ、支那(一九一〇年—一六年)等に通信員として駐在。一九一七年紐育 “Asia Magazine” 主筆。巴里平和會議(一九一九年)。國際聯盟會議(一九二〇年)等にも出席。一九二二年—二六年には日本外務省顧問。一九二七年在支通信員。一九三二年—三三年には滿洲事變に關しジュネーヴに日本代表に隨行した。東京俱樂部員である。主なる著書には “The Balkan Trail” (一九〇六年)。“The Passing of Morocco” (一九〇八年)。“The Chaos in Europe” (一九一九年)。“America's Naval Challenge” (一九一九年)等がある。

孟長泳 [Meng, C. Y. W.] 中國人。ジャーナリスト。米人バウエル經營の上海發行週聞英文誌 “China Weekly Review” に據つて、抗日、排日的論文を毎號掲げてゐる。米國の極東評論家ナサニエル・ベツファーが、一九三七年夏 “China Weekly Review” 誌上「支那は日本と戦ふべからず」なる論文を發表し、支那の輕舉を戒めたのに對し、同誌上にて、猛然これに反駁を加へ、「何故支那は戦つてはならぬか？」なる公開狀を、ベツファーにたゞきつけて、外國人の注意を惹いた事がある。

モーリシヒ [Molisch, Dr. Professor Hans] 奥國人。哲學博士にして大學教授。一八五六年二月六日 “Brno, Moravia” に生れウィエナ大學卒業。後一八八五年同大學植物解剖及び生理學講師、一八八九年

“Graz” 高等工業學校助教授等を経て一九〇九年—二五年ウィエナ植物生理學研究所長であつたが、この間ジャワ、英領印度、日本等に植物研究旅行を二回行つた。一九二二年—二五年に亘つては日本政府に招聘せられ東北帝國大學教授ともなつた。現に “Vienna Academy of Science” の副總長である。政界に於ては獨逸ナチス黨員である。主なる著書に “Pflanzenbiologie in Japan” (一九二六年)。“In Lande der aufgehender Sonne” (一九二七年)等がある。

モーリス [Morris, G. A.] 英國人。新聞記者。英國ギルフォードの專門學校卒業。サリー・エンド・ハンツ・ニュース通信社に入り記者となる。歐洲大戰に従軍。一九二二年パークシャー・クロニクル紙に入社。轉じてリーディング・マーキュリー、ハーフォード・ジャーナル等の記者を経て一九二五年支那に渡り一九三二年迄テンシン・タイムス記者、同十一月上海に轉じてシャンハイ・タイムスの記者となる。

モーリス [Morris, J. R.] 米國人。新聞記者。米國ミズリー大學卒業後一九二〇年當時のトランス・パシフィック社の副主筆フライシャー氏の秘書として日本に来て東京に駐在。後米國に歸り U. P. 社に入りメキシコ・シテイ駐在となつたが、一九三三年當時東京駐在 U. P. 極東部長のヴォーン氏の後任となり、極東本部を上海に移して同地に駐在。(東京には “Ray Marshall” を派遣した)。

モーリス [Morris, Roland Sletos] 米國人。法律家にして外交家。一八七四年三月一日ワシントン州オリムピアに生る。一八九六年プリンストン大學 B. A. 一九二二年同校法學博士となり一九二四年同校國際法學教授となる。また生命保險會社及び火災保險會社等の支配人等であつたが一九一七年—二二年には駐日本米國大使にも就任した。日本在任中シベリヤ特派使節となつた。一九三四年には “Princeton” 大學 “Life Trustee” に推薦せらる。現在は日本亞細亞協會々員、日本協會々員等である。日本に好意を有してゐる。

モール【Mohr, Anton】 諾威人。哲學博士にして經濟學者。一八九〇年生。オスロー大學、オックスフォード大學、ライプツヒヒ大學、ローザンヌ大學等に學びたる後オスロー大學教授となる。主なる著書に「The Bagdad Railway」（一九一七年）。「The Fight for the Nile」（一九一三年）。「The Oil War」（一九二五年）。「The Persian Gulf」（一九三一年）等がある。政治的には「Right party」黨員である。

モールトン【Moulton, Harold Glenn】 米國人。經濟學者。一八八三年一月七日ミシガン州ルロイに生る。一九〇五年アルビオン大學に學び後シカゴ大學、紐育大學等にも學び一九三三年ワシントン大學にて法學博士となる。一九二二年シカゴ大學經濟學教授となる。一九二八年以來華府「The Brookings Institution」の總長となる。主なる著書には「Waterways vs Railways」（一九二五年）。「Financial Organization of Society」（一九三〇年）。「The Formation of Capital」（一九三五年）。「Japan, An Economic and Financial Appraisal」（一九三一年）等がある。

モーレー【Morley, Alfred】 英國人。新聞記者。英國のバブリック・スクールを出て私教師に就て高等教育を受く。新聞記者となり英國のリーディング・マキユリー、ウエリントン・ウィークリー・ニュース、ホルステット・タイムス等を経て一九一五年渡支、香港に於てホンコン・テレグラフ、サウス・チャイナ・モーニング・ポストの記者となつたが、一九三一年上海に轉じシャンハイ・タイムス紙の主筆となる。

モーレイ【Morley, Felix (Muskett)】 米國人。「Washington Post」主筆。一八九四年一月六日ハヴァツフオードに生る。一九一五年ハヴァツフオード大學 B. A. 一九二二年オックスフォード B. A. 一九一六年——一九七年フィラデルフィア市「Ledger」及び「United Press」等の通信員。一九二二年——一九二九年「Baltimore Sun」の編輯員。極東（一九二五年——六年）ジュネーヴに同通信員として駐在。一九二九年、講演を行つてゐる。

年——三一年米國國際聯盟協會壽府支局長等を歴任し一九三三年二月一八日以來「Washington Post」の主筆となる。主なる著書には「Unemployment Relief in Great Britain」（一九二四年）。「Our Far Eastern Assignment」（一九二六年）。「The Society of Nations」（一九三二年）等がある。

モーレット【Maurette, Ferdinand】 佛國人。一八七八年生。「Ecole Normale Supérieure」卒業後一九〇四年——二四年同校幹事。一九一〇年——一四年同校講師。一九三四年渡日し、日本の工業状態労働状態を研究した。一九一〇年——二四年「Ecole des Hautes Etudes Commerciales」經濟地理學教授。一九一七年——一九九年陸軍參謀本部經濟部委員等を経て一九一九年平和會議には植民省次官となり。一九二〇年ジュネーヴ國際労働事務局調査部長に就任現在に至る。佛國にては、しばしば日本の労働條件等について、講演を行つてゐる。

モドルハンメル【Modlhammer, Franz Ludwig】 獨逸人。「Moskaus Hand Im Ferner Osten」一九三七年、の著書がある。

モラエス【Moraes, Dr. Evaristo de】 ブラジル人。辯護士・大學教授。ブラジル刑法學の最高權威にしてリオ法科大學教授に就任。日本人移民の擁護者にして新聞雜誌等に寄稿してゐる。

モラン【Morant, Soulié】 佛國人。前北京フランス學院教授。數年支那に在住して日支問題に關しジュール・ル・デ・デバ、レヴェュー・ド・パリ或はレヴェュー・エブドマデル等に寄稿してゐる。滿洲事變に際しては親日的の論評を試みた。

モレーノ【Moreno, Guillermo】 メキシコ人。交通省課長・日本公使館囑託。日本通にして日本語に通じメキシコ國立大學に日本語科を創設し主任教授となる。一九二三年來日本公使館囑託となる。日本名を自ら森野義衛門と命名してゐる。

モリアーノ【Morreale, Eugenio】伊太利人。新聞記者。政治記者にしてボボロ・デイタリア及びメッサゼーロ等のウイン特派員。極東及び日本の政治問題を研究して之を論評した。

モレステ【Moreshe, J. S.】佛國人。新聞記者。一八八七年パリに生る。パリイ大學法文科卒業。文藝記者となつてマチ・パリジャン、リベルテ等の記者を経て一九二七年マチ・パリジャン紙の極東通信員として上海に駐在、傍ら同地の佛字新聞ジュルナル・ド・シャンガイの主筆を兼任。

モンシャルヴィル【Moncharville, Maurice Leconte】佛國人。元大學教授。植民地法制學の權威にして嘗て駐佛日本大使館の囑託であつたが一九三〇年朝鮮總督府、臺灣總督府、關東廳等の招請で各植民地を視察し法制の研究をした。またシャム政府の顧問となつたこともある。後ストラスブルグ大學植民法制學講座を擔任してゐたが一九三四年引退。主著“Le Japon d'outre-mer”（一九三一年）。“Le Conflit Sino-Japonais”（一九三一年）。

モンロー【Monroe, Paul Ph. D., LL. D.】米國人。一八六九年インディアナボリス州マディソンに生る。コロムビア大學教育史教授、並びに同大學師範部長（一九一四年—二二年）高等師範部長。エール大學其他の講師たりしことあり。各種教育關係事業に關係す。教育關係の著書多數あり。東洋問題に興味を有し、度々支那へ旅行した。先年我國をも訪問した。

ヤ

ヤード【Yard, James】米國人。宗教學者。永年支那に在住し一九二七年歸米後ノースウエスタン大學の宗教學部教授となつたが辭職し、支那の雜貨業を営む。支那最負である。

ヤコントフ【Yakontoff, Victor A.】白系露人。帝政時代に駐日ロシヤ大使館附武官たりしことがある。革命後、米國にて評論家として生活する。最近、日本に關する著書を出したが、日本へは輸入禁止となつた。其他の著書として“Russia and Soviet in the Far East”（一九三四年）。“Chinese Soviet”（一九三七年）がある。

ヤジコフ【Yasikoff, N. N.】白系露人。新聞記者。共產革命に際し亡命した兩親に伴はれて滿洲に移住。哈爾濱中學を卒業。一九二五年上海に來て新聞記者となる。舊師アルノルドフ氏主筆の上海ザリアに入社一年。一九二六年當時ユーゴスラビアの將官であつた叔父を尋ねて歐洲に行く。一九三一年再び支那に歸り上海のスロヅ社の記者となる（家は露國の名門であると云はれる）。

ヤング【Young, A. Morgan】英國人。新聞記者、長年神戸で發行されるジヤパン・クロニクル紙の編輯者だつたが、最近歸米後、再度の日本入國叶はず、現在はロンドンに在つて、各新聞雜誌に寄稿してゐる。

ヤング【Young, C. Walter Dr.】米國人。國際法學者。一九一八年—二二年ノースウエスタン大學に於て政治學を學び極東問題を研究した。殊に日本と支那の外交問題を専門的に研究し大學卒業後間もなく支那、滿洲及日本に旅行し日支の要人と親しく面接して日本の對滿洲問題を研究した。一九二九年京都に開催せられた太平洋會議に對しては“The International Relations of Manchuria”なる參考書を執筆した。一九三二年の滿洲事變當時頃より北京に在住しリットン調査委員會には専門家委員として選ばれて参加しリットン報告書附屬書中の委員會専門家の特別研究第五、六及七號を執筆した。一九三三年にはジュネーヴのリットン報告書審議の聯盟會議に出席した。後北京に歸つてからは北京の“International Women's Club”その他に於て「聯盟と滿洲事變」に關する講演を試みた。その後引續き北京に在

住して太平洋問題調査會の仕事に従事してゐる。主なる著書は“The International Relations of Manchuria”（一九一九年）。“Japan's Jurisdiction and International Legal Position in Manchuria, Vol. 1-3”（一九三二年）の書は日本の滿洲に於ける特殊權益を詳細に研究したもので（一）日本の滿洲に於ける特殊地位。（二）關東租借地の國際法的地位。（三）南滿鐵道地域に於ける日本の司法權、の三冊に別れてゐる。

ヤング夫人【Young, Mrs. A. S.】 歸化米國婦人。美術研究家・放送講演家。東洋文化を研究。シアトル美術館教育部長となる。

五

余楠秋【Yu Nan-chiu】 中國人。湖南省夏沙縣人、一八九七年生。北京清華大學卒業後渡米してフィリッピン大學、イリノイ大學に學び一九二二年歸國してから江蘇省商科大學英語部長、東南大學商科教授等を經て上海復旦大學文學院長となり又國立暨南大學講師を兼ね著書として「日米支間の國際關係」現存及び過去の支那」等多數がある。

楊光注【Yang Kuang-sheng (C. Kuangson Young)】 中國人。江蘇省吳興縣人、一九〇〇年生。北京清華學校卒業後渡米してコロラド大學及びプリンストン大學を卒業哲學博士の學位を得、在米公使館三等祕書、壽府國際阿片會議支那代表祕書、米國ジョージ・ワシントン大學東洋史講師に歴任したのち歸國し北京清華學校教授を経て國民政府外交部に入り駐英公使館一等祕書、倫敦總領事となり歸國後漢口の外交部視察專員となつてゐるが一九三五年辭任して上海英字紙チャイナ・プレスに關係し常務董事となつてゐる。

する。

ヨーク【Yorke, G. T.】 英國人。“China Changes”一九三五年、の著書がある。

ヨーハン【Yohan, E.】 及びターニン（Tanin, O.）ターニンの項を参照。

六

ライオン【Lyon, Gideon Allen】 ジャーナリスト。一八六七年九月二三日ミシガン州サジナウに生る。一八八五年華府ハイスクール卒業。一八八七年華府“Evening Star”記者となり、白雲館附となる。一八九二年—三年“New York Recorder”に轉じたが再び“Star”に歸り上院附記者となる。一八九六年には同誌論說委員となりその間主筆代理ともなつた。歐洲各國及び“Port Rico”日本及び支那（一九二九年）エチオプト（一九三一年）等を旅行し、所屬の新聞其他雜誌等に旅行記や通信記事を寄稿してゐる。日本に對しては公平である。

ライオンズ【Lyons, Eugene】 米國人。新聞記者。一八九七年紐育生れ紐育で成人した。大學を出ると労働生活に入つたが、後新聞記者となる。一九一九年ペンシルヴァル州のエリ・ディスパッチ社に入つたのが記者生活の第一歩であつた。次で經濟紙アメリカン・フィナンシャルの記者、二、三映畫會社の出版物の雜文記者、バリー・ヘラルド、ポストン・テレグラフ紙を経て、一九二三年—二七年ソヴエトロシア政府機關紙タスの紐育支局に入り米國の状況をロシアへ通信。次で今度はその逆コースに入つて一九二八年—三四年の六年間 U. P.（米國合同通信社）モスコ通信員としてロシアに滞在。過激派が政權を執つて以來、新聞記者がスターリンにインタヴューしたのは彼れが最初の人であつた。この間一

九三一年ヘルシヤに出張して同國當時の主權者バシヤ・パレヴィイにもインタビューした。六年間のロシア駐在を終へて米國に歸つてからは、コスモポリタン・マガジン、リテラリー・ダイジェスト、ハーバー、スクリブナー、ネイションその他米國有数の雑誌或は新聞に缺くことの出来ぬ、ロシア通及び國際事情通の寄稿家となつた。主著“*The Life and Death of Sacco-Vanzetti*”（一九二七年これは各國語に譯されたが、ドイツ譯はヒットラーの焚書に遭つた）。“*Moscow*”（一九三五年）。ヘルシヤでの経験は“*Persian Interlude*”と題して“*We Cover the World*”（一九三七年）の中編輯されてゐる。

ライサ【Lajtha, Edgar】米國人。“*The March of Japan*”（一九三七年）の著書がある。

ライト【Wright, Herbert】米國人。國際法學者。一八九二年三月二八日ワシントン市に生る。一九一一年ジョージタウン大學 B. A. 一九二二年カトリック大學 M. A. 及び一九一六年同校 Ph. D. 一九三〇年プリンストン大學法學博士。一九一八年國務省囑託となり國際法及關係事項を編纂。一九三〇年ロンドン海軍會議米國代表記録係、同年政府關係を辭任してカトリック大學國際法教授となる。主なる著書には“*The Constitution of the States at War (1914—1918)*”（一九一九年）がある。

ライト【Wright, Philip G.】英國人。“*Trade and Trade Barriers in the Pacific*”（一九三五年）の著書がある。

ライト【Wright, Quincey】米國人。國際法學者にして大學教授。一八九〇年二月二八日マサチューセッツ州に生る。ロムバード大學卒業後イリノイ大學にて M. A. 及法學博士となる。一九一六年——一九九年ハヴァード大學國際法學助教及ミシガン大學講師等を歴任して、一九三一年以來シカゴ大學國際法學教授となる。主なる著書には“*Control of American Foreign Relation*”（一九二二年）。“*Mandates Under the League of Nations*”（一九三〇年）等がある。

ラインバーガー【Linebarger, Paul Myron Wentworth—“Paul Myron”】米國人。法律家にして著述家。一八七一年六月一五日イリノイ州に生る。一八八九年まで“*Neperhill*”大學及レックフォレスト大學等に學び一八八七年——九二年まで巴里に於て法律を研究し、一八九三年シカゴにて辯護士となる。後白耳義コンゴ協会の講師となり傍ら一八九三年——九五年ハイデルベルヒ大學に學び歸米し一八九五年シカゴに辯護士開業。後米西戰爭に従軍。一九〇一年——〇七年比島第七區米國裁判所判事。辭職後一九二五年孫逸仙の死まで彼の法律顧問であつたが一九三〇年以來支那國民政府法律顧問となつてゐる。支那のプロバガンディストの觀がある。主なる著書には“*U. S. Government*”（一九〇二年）。“*Our Chinese Chances through Europe's War*”（一九一五年）。“*Miss American Dollars*”（一九一六年）。“*The World Gone Mad*”（一九二一年）。“*Sun Yat Sen and the Chinese Republic*”（一九二四年）。“*The Maker of Modern China and His Three Principles*”（一九二九年）。“*La Chine Navra*”（一九三一年）。“*Es Espana otra China?*”（一九三二年）等がある。また、支那國民黨綱領の起草者の一人である。

ラヴァイエ【Lavalle, Ramon B. Munniz】アルゼンチン人。著述家。在東京アルゼンチン領事館員として日本に在住した。その後マレイ聯邦に轉任して、外交官を辭して後スペインに在住。マドリッドに發行されてゐた雑誌ラ・シウダ誌に日本に關する記事を寄稿してゐた。主著“*Japón ante el Mundo*”。

ラヴァル【Laval, C. J.】米國人。新聞記者。大學卒業後 A. P. 通信社に入つて記者となる。次にホルル・アドヴァタイザー紙編輯員を辭してホルル裁判事務執行官に任命さる。これを辭して一九一九年支那に渡り元の A. P. 通信社支局長となると共にチャイナ・プレス紙の主筆を半年、一九二〇年同紙が孫逸仙一派に買収さるゝに及んで改めて主筆。後シャンハイ・ニュース紙を創刊。一九三三年故プロ

ンソン・リー氏が満洲國に招聘せられて顧問となるに及んで、彼の後を襲ふてファー・イースタイン・レヴェーの主筆となる。

ラウシエンブツシロ【Rauschenbush, Stephen】米國人。上院軍需品委員会の役員として、其の方面の調査に關しては權威者である。極東問題に就いても深い造詣を有し、極東に關する夫妻の共著がある。ダートマウス・カレッジにも教鞭を取る。

ラヴリング【Loving, Paul】米國人。新聞記者。一九三一年—三二年の滿洲事變に際しチャトル・タムス紙に極東問題を論評。後同紙主筆となる。

ラシヤン【Lachin, Maurice】舊露國人。新聞記者。最初ラヂオ通信等の記者。後ジュルナル・デ・デバの記者となり一九三三年日本、支那、滿洲を視察旅行して日滿問題を研究しこれを紙上に論評した。

一九三九年同紙を去る。主著「Japan」(一九三四年)。

ラスカー【Lasker, Bruno】米國人。太平洋問題調査會委員として、極東問題を研究してゐる。最近、「Japan in Jeopardy」と云ふパンフレットを出した。

ラスムッセン【Rasmussen, O. D.】英國人。「The Reconquest of Asia」(一九三四年)の著書がある。

ラツレーツト【Latourette, Kenneth Scott】米國人。大學東洋史教授。一八八四年八月九日米國オレゴン市に生る。一九〇四年リンフィールド大學 B. A. 一九二二年同大學に於て神學博士となる。大學を出ると學生の外國傳道運動に参加したりして熱心なキリスト教化運動者となつたが、東洋史を研究して各種大學に於て講師或は教授に歴任した。その後、日本の事情に就ても研究し、米國の對極東傳道事業を指導した。現在は米國に於ける日本語研究會、支那語研究會、對支政治經濟協會、支那歴史協會、日本協會、亞細亞協會、國際問題研究會等の有力な會員となつてゐる。主著「Development of China」(一

九一七年)。「Early Relations between the U. S. A. and China (1787—1844)」(一九一七年)。「Development of Japan」(一九一八年—一九三一年, 3d ed.)。「Chinese: their History and Culture」(一九三四年—一九三五年)。

ラツセル【Russel, Lindsay】米國人。紐育「Japan Society」會長。日露戰爭後大正年代の初に我邦に來た事がある。後大正九年及び大正一三年に加州及び全米の排日問題が起るや、新聞に雜誌に大いに日本を辯護した。

ラテイモア【Latimore, Owen】米國人。「Pacific Affairs」主筆。一九〇〇年七月二十九日ワシントン州に生る。一九一五年—一九年英國セント・ピース・スクールに學び一九一九年ハヴァド大學の「Graduate Scholar」となる。一九二〇年上海にて商業に従事し一九二二年天津にて新聞記者となり再び一九二二年—二六年天津北京等にて商館に勤務したが再び記者生活に入る。この間支那滿洲各地を旅行し新聞雜誌等に其旅行記を發表した。また「Pacific Affairs」の編輯長ともなつたことがある。日本を諒解せる支那學者である。主たる著書には「The Desert Road to Turkestan」(一九二九年)。「High Tartary」(一九三〇年)。「Manchuria, Cradle of Conflict」(一九三二年)。「The Mongols of Manchuria」(一九三四年)その他「Atlantic Monthly」:「National Geographic Magazine」:「Asia」等に極東及び日本等に關して常に寄稿してゐる。

ラデック【Radek, Karl Bernhardovitch】ソ聯人。一八八五年生。評論家。ギリシャ生れの放浪的社會運動家。一九一七年十月入露。ロシア共産黨に入黨し、トロツキー派に加擔し黨から除名されたが一九三〇年復黨。日本及び極東問題に關する數多くの論文を執筆してゐる。ソ聯に於ける特異な存在となり、「イズヴェスチヤ」紙編輯者員たつたが一九三六年以來のジノヴィエフ事件の連累者として禁錮十年の

刑に處せらる。

ラボマレード [Lapomarde, Baron de] 佛國人。退役陸軍中佐。フランス印度支那駐屯軍附となり、後北京及び東京駐在武官を経てシヤム駐在に變つたが、東京駐在中は青島戰役には日本軍に従軍した。一九三三年シヤム駐在武官を辭任して、更に支那、日本、滿洲を視察して極東問題を研究、結果をエコー・ド・パリ紙に掲載した。

ラムステッド [Ranstedt, Gustav J.] フィンランド人。東洋語學者。大學に東洋語學を學ぶ。一九二〇年——二八年駐日フィンランド代理公使。日芬協會々長、ヘルシンキ大學東洋語學教授となる。

ラモント [Lamont, Thomas W.] 米國人。"J. P. Morgan" 商會の總理事。大正十二年大震災の爲に募集した米債は此人の力で出來た。支那及日本通で日本が震災後再起し得るとの保證をした人で、其點から見て日本の知己である。度々我邦にも來た事がある。故井上準之助氏の知友。

ラロイ [Laloy, Louis] 佛國人。文學博士。音樂批評家にして歴史家。"Ecole Normale" 主筆。一八七四年生。一九一四年以來 "Grand Opera" 總務。"L'Ere Nouvelle" 誌其他に於て音樂及び劇評を試みてゐる。"Mercure Musical" (一九〇五年) の創立でもある。支那音樂を研究し支那に旅行す。主なる著書に "Claude Debussy" "La Musique Retrouvée" "La Musique Chinoise" 等がある。

ラント [Lunt, Carroll] 米國人。ジャーナリスト。宣教師の子として支那に生る。上海パブリック・スクール卒業後英國に遊學。大學を卒業して再び支那に戻り一九二五年チャイナ・ダイジェスト誌を創刊して經營し主筆となる。

リ

リーフ [Leaf, Earl H.] 米國人。新聞記者。滿洲事變以後 A. P. (米國新聞聯合社) 特派員として、支那で活躍した。一九三六年夏、中國ソヴェット區に潜入し、これを詳細に觀察したが、エドガー・スノーの如く、ジャーナリズム方面に、發表はしなかつた。親支的である。

リヴェッタ [Rivetta, Pietro S.] 伊太利人。新聞記者。ローマ東洋語學科に於て日本語を修得。後同市トリブーナの記者となり極東問題を擔任してゐた。母校に於て日本語教授に任ぜられたが、辭してローマの週刊紙トラヴァーズ・デレ・イデー(思想の交換)を經營し社長となる。一九三八年三月、イタリイ對日親善使節に加つて來朝す。ユーモリストにして、漫畫誌を刊行してゐる。日本名を里別田稗太郎と云ふ。

李應林 [Li Ying-lin] 中國人。廣東市人、一八九四年生、米國オベリン大學出身で廣東 Y. M. C. A. 祕書長、廣東政府社會調查局長、廣東嶺南大學副校長等に歴任し著書に「蘇聯見聞記」「廣東の情勢」(美文)等があり太平洋問題調査會京都會議に支那代表として出席してゐる。

李權時 (雨生) [Li Chuan-shih (Yu-sheng)] 中國人。浙江省鎮海縣人、一八九五年生。北京清華學校卒業後渡米して、ペロイット大學及市俄古大學に學び市俄古大學の哲學博士の學位を受け上海の復旦大學、商科大學、光華大學、大夏大學等で經濟學及商業學を講じたのち復旦大學商學院長に歴任其他勞動大學暨南大學でも教へてゐたが一九三四年上海銀行公會發行の「銀行週報」の編輯長となつた。「支那經濟問題摘要」「民生主義概要」等の經濟專門書のほか「中日經濟關係」等の對日經濟問題にも筆を振つて

る。

リッチ [Ridge, W. Sheldon] 英國人。ジャーナリスト。一九三二年北平に英字日刊新聞ベイピン・クロニクルを創刊しその主筆となる。

リットマン [Ritman, J. H.] オランダ人。ジャーナリスト。一九一〇年ジャワに渡來、以來新聞記者として各地を轉々しバタヴィア・ニースプラット紙の主筆となる。日本の南進政策を反撃してゐる。

リットン [Lyton, (Earl of) Victor] 政治家。一八七六年生。一九一六年——一九一七年海軍政務官を経て、一九一八年樞府顧問官。一九二〇年——一九二二年印度事務官、一九二七年ベンガル政務長官に就任、一九二五年印度總督となる。一九三二年一月、日支問題紛争に際して國際聯盟日支調査委員會議長として支那及び日本を訪問し、認識不足の報告書として有名な、リットン報告書を發表した。氏はまた、一九一八年上院に於て教育法案の通過を指導せしことで最も記憶されてゐる、伯爵。

リップマン [Lippman, Walter] 米國人。著述家。新聞記者。一八八九年紐育市に生る。ハーヴァード大學に哲學を修す。雑誌ニュー・レパブリック記者、紐育ウォールド主筆（一九三一年まで）その後、重慶にニューヨークヘラルド・トリビューン紙のために筆をとる。極東問題に關してしばしば意見を發表してゐる。"The United States in World Affairs, (一九三二年) 其他著書多し。

リヒトハルト [Lighthart, Th.] オランダ人。實業家。バタヴィヤ商會社及びジャバ銀行の重役、蘭領東印度國民參議會員等に歴任。極東の經濟事情に通じ、日本の南洋方面への經濟的發展に對し理解ある論評を試みてゐる。

リュールカン [Lieurquin, Robert] ベルギー人。軍人にして極東事情研究家。支那事變に際し、正しき認識の必要を認め、極東方面一帯の實地踏査を試み、その報告書を自一九三七年十二月十八日至一九一三

年一月二十五日に涉り、週刊誌 "L'Europe Nouvelle" に連載發表した。その觀察は公平正確にして内外識者の注目を惹いた。

リュセイ [Lucey, A. E.] 米國人。新聞記者。上海に於けるタウン・エンド・スポーツマン、コマーション・エンチニヤ、インシニエランス・レヴェュー等の主筆となる。

劉湛恩 [Liu Chan-en] 中國人。一八九六年生。上海滬江大學長。米國コムロピヤ大學出身の哲學博士。上海 Y. M. C. A. に關係す。排日家として知られ、外國新聞雜誌に、屢々排日評論を執筆した。昭和十三年四月支那人のため暗殺さる。

リュフェ [Ruffe, Baron R. D'Auxion de] 佛國人。辯護士。一八七五年パリに生る。最初佛領印度支那に移住。一九〇六年支那に轉居。一九一四年——一九一八年大戦に出征。再び支那に來て上海に定住し、上海フランス義勇軍將校、外國居留民團副會頭等に歴任。ル・マタン紙の通信員を囑託された。主著 "Chine et Chinois d'Aujourd'hui" "Is China Mad?" "Le Probleme Chinois"

劉彦 (武南) [Liu Yen (Shih-nan)] 中國人。湖南省醴陵縣人、一八七九年生。日本留學出身で衆議院議員、華府會議中國代表團諮議を経て北京中國大學及び國立清華大學の外交史教授となり次いで北平大學院講師となつたが、「帝國主義の中國歴史」「最近三十年中國外交史」「被侵略の中國」等の著書あり列強の對支進出に關し論評が多い。

劉師舜 (琴五) [Liu Shih-shun (Chin-wu)] 中國人。江西省宜豐縣人、一九〇〇年生。北京清華大學卒業後渡米ハーバード大學、コロンビア大學に學び哲學博士の學位を得、歸國後清華大學教授を経て外交部條約委員會委員、内政部參事、立法院立法委員、外交部歐米司長に歴任し旁ら中央大學副教授、中央政治學校講師を兼ね、「領事裁判權問題」等の著書がある。

リヨテー【Lyauté, Pierre】佛國人。現在は實業家として“Association de l'Industrie et Agriculture Français”の會長であるが、有名なるリヨテー元帥の甥にして、パリ社交界に廣く知られてゐる。外務省に入りモロッコ、シリア等に勤務したこともある。シリアに於ては高級委員長グロー中將の官房長を務めた。その後中歐、英國、米國等に經濟調査委員として派遣せられた。經濟新聞“Journé Industrielle”の主筆であつたこともある。一九三二年—三三年には東洋旅行をして支那及び日本、滿洲の政治經濟狀態を調査研究した。歸佛後は上院外交委員會等に於て其研究の結果に就き講演し日本を支持してゐる。現在“Revue de Paris”、“Le Journal”等に寄稿してゐる。主なる著書に“La Drame Orientale”；“La Bataille Economique”；“l'Empire Colonial Français”；東洋旅行後日本及び支那に關するものや“Chine on Japon”がある。

リモンテ【Llorente, Francisco Martin】スペイン人。退役陸軍大佐、著述家。スペイン陸軍大學教官等を歴任し歐洲大戦中には國內の新聞に戰爭論等を執筆した（筆名 Armando Guerra）。主著に極東問題を取扱ふた“Guerra futura”「將來の戰爭」がある。

梁鏗立【Liang Chien-ii】中國人。浙江省新昌縣人、一九〇三年生。米國留學出身で法學博士の學位を有し商務印書館編輯、外交部祕書、司法部祕書を経て上海臨時法院民事部推事となり次いで駐米公使館三等祕書、國際聯盟總會支那代表團專門委員、ヘーグ國際法編纂會議支那代表團專門委員を歴任し歸國後行政院參事、外交部祕書、東吳大學及び中央政治學校國際法教授となり一九三六年以來外交部條約委員會專任委員の職に在るが國際法專門著書のほか「極東危機の第一年」の極東問題論評がある。

リニコ【Lilico, Stuart】米國人。新聞記者。一九三一年米國オレゴン大學卒業直後渡支、上海のイヴینگ・ポスト紙の記者となる。後轉じてチャイナ・ジャーナル紙の編輯員となる。

林語堂【Lin Yu-tang】中國人。福建省龍溪縣人、一八九四年生。上海聖約翰大學卒業後北京清華學校に教鞭を執る傍ら英文雜誌「中國社會政治科學評論」の記者となり次いで米國ハーヴァート大學及び獨逸ライプツヒ大學（哲學博士を受く）等で言語學を研究して歸國、北京大學言語學教授、北京師範大學講師、北京女子師範大學英文學部長、廈門大學文科主任等の教職に在つたが一九二七年武漢政府に入り革命外交家陳友仁の下に外交部祕書となつた。其後國立中央研究院外國語編輯を勤めたが一九三六年以來米國に在る。専門の言語學に關する著書のほか小説、劇曲等の作品をも發表し一面文學者として知られてゐる。渡米後、最近の日支關係緊張するや米國各新聞紙に日支問題に關する論文を盛んに寄稿し又各地に遊説し米國に於ける極東問題論壇にしきりに活躍してゐる。

林柏生【Lin Po-sheng (Shih-chuan)】中國人。廣東省人、一九〇一年生。廣東基督敎學校及びモスコイ中山大學を卒業し、廣東工藝學院訓練指導員、ソ聯並歐米國情調査委員を経て中華日報の編輯長となり又立法院立法委員に擧げられてゐる。汪精衛系の有力分子の一人で汪機關紙たる中華日報上に汪の意見を代表してゐるほか昭和十年一月日支關係調整に向ふ氣運起りつゝあつた時蔣介石系の徐道隣の「日本は敵か友」の論文に續いて「二筋の對日路線」なる論文を發表し此の氣運を高める爲め汪の意を受けて書いたものとして注目された。

林文慶【Lin Wen-ching (Meng-chin)】中國人。福建省同安縣人、一八六九年新嘉坡に生れ、英國エヂンバラ大學及ケンブリッジ大學で醫學を修め歸國後新嘉坡で實業に従事する傍ら新嘉坡醫學校教授を兼ねてゐた。孫文の老友で民國成立後南京に來たり衛生部長となり次いで廈門大學校長に就任したが其後上海でチャイニーズ・ネーション誌の編輯長となり“Tragedies of Eastern Life”、“The Chinese Crisis from Within”、“The New China”等の著書を出した。一九三二年再び廈門大學校長の職に在る。

林芳伯 [Lin Fang-Po] 中國人。廣東市人、一九〇一年生。上海聖約翰大學中學部、武昌文華大學を卒業。後漢口ヘラルド紙の記者から同紙採訪主任となり又、米國 D. P. 通信社次いで英國ルーター通信社の漢口通信員を歴任したが現在はローターの廣東通信員を勤めてゐる。

ル

ルーベジャンスキイ夫人 [Roube-Jansky, Alexandra] 佛國婦人(混血)。小説家、新聞記者。歐洲大戰直後は君府に在住して小説を書く。後パリに轉居。一九三四年パリ・ソワール特派員として支那、日本及び滿洲國を旅行。歸佛後カンデッド紙に滿洲國皇帝謁見記を寄稿したり、日本及び滿洲國に關する講演をしてゐる。

ルイス [Lewis, Judd Mortimer] 米國人。詩人ユーモリスト。一八六七年九月紐育フルトンに生る。パブリック・スクールを出たのみであるが一九二〇年にはベイロア大學に於て文學博士となる。始めは新聞社にステロ印刷工として入つたが後日 "Houston Post" 紙の支配人兼編輯者となり同紙に詩及び滑稽物を執筆して人氣を博した。同紙の "Baby Bureau" 欄は有名である。主なる著作に "The Old Wash Place"; "Christmas Day" があるが、カーネギー財團極東調査團に選ばれて極東を旅行したこともある。

ルイトレン [Luitlen, Gert] オーストリー人。ジャーナリスト。専門學校を出て新聞記者となり、ドイツ及びバルカン地方に特派員となつてハンブルガーフレムデンブラット、ツェルノヴィツァ・モルゲンブラット等に寄稿してゐるが、後アメリカに渡り本國の新聞に通信する傍ら、シカゴ市のドイツ語新聞アーベント・ポスト及びゾンタックス・ポスト紙の記者となつて日本の商品に就て論評してゐる。

ルジャンドル [Legendre, A. F.] 佛國人。醫學者にして極東通。ポルドー海軍醫學校卒業。佛領印度支那に派遣さる。一九〇一年外務省囑託となつて支那に出張したが一九〇二年支那政府に聘せられて四川省成都に醫學校を開設し一九〇九年まで校長。之を辭して一九一〇年には自然科學及人類學研究の目的を以て支那全土及マレイ半島を踏査。一九二八年佛國文部省囑託として日本及朝鮮に人類學及地理學を研究した。一九三一年—二年の滿洲事變の際佛國新聞及雜誌、或は英國のそれに親日的の評論を多數寄稿した。日本政府より勳三等瑞寶章を授與せられた。主著 "La Civilisation Chinoise Moderne, Chez payot" "La crise mondiale l'Asie"

ルビンシュテイン [Rubinstein] ソ聯人。日本に關する論文が多い。

ルブール [Reboul, A.] 佛國人。ジャーナリスト。一九二六年佛領印度支那に渡來。ハノイの佛字日刊新聞フランス・インドシノ、ラ・アミ・ド・ビーブル・インドシノ等の記者を経て、一九三一年經濟雜誌レ・メルキュール・インドシノを創刊し社長兼主筆となる。

ルフト [Luit, Hermann] 獨逸人。ドイツチェ・クルツェ・ポスト主筆。一九〇〇年フランケンタールに生る。フライブルグ、ハイデルベルヒ及びベルリン等の大學に於て言語學、哲學又は政治學を修めたが、後新聞記者となる。外交問題及び極東問題を研究して論文を新聞或は雜誌に發表してゐる。一九三〇年來現職に就く。

ル

ラー [Ray, Jean] 佛國人。駐佛日本大使館囑託。アフエール・エトランジェール法律問題主幹。一八八四

年生。一九〇七年高等師範文科卒業。後佛國陸軍幼年學校、カイロ佛國法律學校その他の講師或は教授を経て一九一六年——一九九年日本に招聘せられて東京帝國大學佛法教授、一九一八年——二四年及び一九二七——二九年日本外務省顧問。その間 聖上陛下 御用掛、國際聯盟第十五回總會「ポリビア」代表部顧問。歸佛後一九三〇年來駐佛日本大使館囑託。一九三一年「アフェール・エトランジュール」創刊主著「Essai sur la Structure logique du code civil français」(1926)。「Commentaire du Pacte de la

S. D. N. selon le politique et la jurisprudence des organes de la société」(1930)。
レーベデフ【Lebedev】ソ聯人。日本の軍部に關する論文が多い。論文「日本の陸海軍」(クラスナヤ・ズヴェズダ紙一九三三年九月) 其他がある。

レーマン【Remer, Charles Frederick】米國人。大學教授。一八八九年六月一六日ミネソタ州に生る。一九〇八年「ミネソタ」大學 B. A., 一九一七年「ハーヴァード」大學 M. A., 一九二三年同大學にて哲學博士となる。一九一〇——二二年比島政府教育局に勤務。一九二二——二五年在上海「セント・ジーンズ」大學經濟學教師、一九一七——二二年同大學教授。一九二二——二四年「ハーヴァード」大學教師等を経て一九二八年以來「ミシガン」大學經濟學教授となる。一九三五年には米國經濟使節の一員として極東を再び訪れた。支那及び極東の經濟事情通として知られ、同問題に就て雜誌等に寄稿してゐる。また一九一九——二二年には「チャイナ・ワークイリー・レビュー」の主筆をしてゐたこともある。

主著「The Foreign Trade of China」(一九二六年この書は一九三〇年日本語に譯された)。「American Investment in China」(1929)。「Foreign Investment in China」(1933)。「A Study of Chinese Boycotts」(一九三三年この書も一九三五年日本語に譯された)。

レールス【Leers, Dr. Johann Von】獨逸人。評論家。一九〇二年生。「キール」大學及び「ベルリン」

大學等に於て法律及び歴史學を修め、また東洋語學科に於て日本語を學び外務省に入る。後「ナチス」政治運動に参加して外交政治評論として立つ傍ら「ベルリン」大學政治外交講師となる。日獨協會々員。

レイコック【Laycock, D. W.】英國人。實業家・新聞通信員。在哈爾濱「マンチュリア・コムパニー」(英國人 Watson 經營)副支配人。ロンドン「ロイテル」通信社及び「インタナショナル・ニュース・サービス」社の特派員、「デイリー・エクスプレス」紙の通信員等を兼任(その通信記事は多く反日滿的で正確でない)と云はれてゐる。

レイス【Reyes, Napoléon】ブラジル人。外交官。一八六七年ミナス・ゲラス州に生る。一八九三年海軍叛亂事件に關係一八九四年——九九年遞信事務官たり、一九〇〇年外務省に入る。支那語日本語を始め東洋諸國語に通じ主として調査事務を司る。一九一四年より一七年に亘り日本及び支那にあり、ブラジルに於ける東洋通として知らる。

レヴィ【Levy, Roger】佛國人。太平洋問題研究委員會書記にして「ルローブ・ヌーヴェル」誌記者。太平洋問題と共に極東問題を研究し、國際政治外交週刊雜誌である「ルローブ・ヌーヴェル」誌に日支問題を論評した。主筆「A qui la Mandchourie」(1932)。「Extreme-Orient et Pacifique」一九三五年年等がある。

レヴィ【Lévi, Sylvain】佛國人。College de Paris 教授。大正一五年東京の日佛會館學長として赴任した。東洋に關する著書が多い。著書「Le Népal (3 vols)」。「Mélanges d'indianisme」,

レウイソン【Lewisohn, W.】英國人。新聞記者。「ロンドン・エクスチェンヂ・テレグラフ」紙の特派員として北京に駐在。傍ら「ノース・チャイナ・デイリー・ニュース」紙の通信員を兼ねてゐた。

レヴェス【Révész, Andris】チェッコ人。著述家。「パリー」大學。「ブダペスト」大學等に於て法學を修

め、新聞記者となつてマドリッド市の「エル・ツル」及びブエノスアイレス市の「ラ・ナシオン」紙のバルカン特派員として同地方に在在。極東問題をも研究して東洋に於ける日本の立場に就て論評してゐる。一九三二年滿洲國が成立するや「スペイン百科辭典」にその事項を執筆した。

レヴエントロー【Reventow, Ernst von】獨逸人。政治家、新聞記者。一八六九年生。一八九八年迄海軍に籍を置いたが、後新聞界に入りドイツ大海軍主義の宣傳に努めた。一九二四年來ナチス黨國會議員となり、週間紙「デア・ライヒスワルト」の主筆を兼ねたが、三五年ヒットラーの教會政策を論難した廉により同紙の發行停止の厄に遭つた。「日露戦争」をはじめ政治史に關する著書多し。

レヴォレド【Revoredo, Dr. Julio de】ブラジル人。辯護士。一八九七年リオ・グランデ・スールに生る。法科大學卒業。サンパウロ市に於て新聞記者となる。後辯護士となり、また聯邦政府の官吏となり督學官となつた。日本移民を禮讚した著書に「Imigranso」（一九三四年）がある。

レオ【Leo, Rea】イタリイ人。新聞記者。一九三四年「ラ・スタンバ」の特派員として極東に派遣せられ、日本滞在中は經濟問題を研究して通信した。

レストンナ【Lestonnat, Raymond】佛國人。新聞記者、海軍通。青年時代には海軍士官として佛國軍艦で東洋に巡航し日本にも來た。退役後新聞記者となり「ル・ジュール」及び「イリュストラシオン」誌の海軍記者となる。一九三四年ロンドン海軍豫備會議に際しては同紙上に親日的評論を試みた。

ランドマン【Redman, H. de Vere】英國人。新聞記者。日本の軍部に關する論文を、Nineteenth Century 誌や「Fortnightly」誌上にしばしば發表した。近年來朝して、ジャバン・アドヴァタイザー紙編輯記者となつた。一九三八年春、外國記者團一行と共に、支那事變後の北支を視察した。デイリイ・メーの東京特派員。著書「Japan in Crisis」一九三五年。

ラナウ【Lerch, Theodor von; General Major】オーストリア人。退役陸軍少將、日本陸軍スキーの父。

日露戦争當時には在東京奥國公使館附武官であつたが後一九一一年—一九二二年には高田市の歩兵第五十八聯隊に奥國參謀將校中尉の資格を以て隊附となりスキー術を初めて日本陸軍に教へた。奥國に於ける日本及極東通の一人にして一九三四年には「Kriegesfahr im Fernen Osten」;「Der lebende Buddha der Mongolei」等の論説を新聞に發表してゐる、他時々日本及び東亞の問題に關して奥國の諸新聞に寄稿してゐるが、現在にはまた軍事的論説の寄稿家として活動してゐる。更に支那事變勃發するや昭和十三年二月皇軍正義の奮戦振りに感激してウイーンの隠棲地から昔居た我が聯隊に宛て追懐と感激の手紙を寄せて來た。

□

ローウェル【Rowell, Chester Harvey】米國人。著述家。記者。一八六七年一月一日イリノイ州に生る。一八八九年ミシガン大學卒業後ベルリン、パリ、ローマ等の大學に學び、一八九八年—一九二〇年まで「Fresno Republican」の創刊者主筆として活躍し傍ら「Stanford」及び加州等の大學で新聞學及び政治學等の講師となつてゐた。一九三二年以來は「San Francisco Chronicle」主筆である。一九二九年太平洋京都會議及び一九三二年同上海會議等出席し日本及び極東の事情を研究しこれに通曉してゐる。

ローザンヌ【Lauzanne, Stephanie】佛國人。ジャーナリスト。「Le Matin」外報部長。日本政府より勳三等旭日中綬章を授與せらる。日支事件の如き屢々自ら健筆を揮ひ支那の無政府状態、共產化の危険、聯

盟の無謀等に関し痛論し、日本の立場を支持した。日本に對しては好意を寄せてゐる。主なる著書に、
 “Au Chevet de la Turquie”, “Instantané d’Amérique”, “Feuilles de route d’un mobilisé” 等がある。
ロシホルト【Rosholt, M. L.】米國人。新聞記者。米國「ワシントン」大學卒業直後渡支、上海事變直
 前上海に來て「チャイナ・プレス」社に入り海軍擔當記者となる。一九三三年來北支及び滿洲國を視察
 した。

ローゼン【Rozen, A.】ソ聯人。論文「日本の燃料根據地」其他がある。

ロート【Roth, Dr. Wilhelm H. H.】獨系米人。一九三二年始迄、日本の高等學校に語學教師として、職
 を奉じてゐた人物である。歸米後、排日的文章を執筆してゐた。一九三二年夏、全米のハースト系新聞
 紙上「Japan Expects War with U. S. Soon」なる表題下に、排日記事を連載して、注意を惹いた。

ローボ【Lobo, Bruno】ブラジル人。醫學博士。一八八五年パラ州に生る。國立醫科大學卒業後「リオ」
 醫科大學教授、國立博物館長等に歴任。日本及び日本人移民を激賞し「オ・ジホルナル」等に寄稿す
 る親日家である。現在「リオ・デ・ジシャネイロ」醫科大學細菌學教授。主著「Japonezes», “De Japonez
 ao Brasileiro”

ローリントン【Rawinson, Frank Joseph】歸化米國人。一八七一年一月英國に生れ一八八八年米國に來
 り一九〇二年歸化した。一八九九年ペンシルヴァニア州バックネル大學 B. A., 一九一七年同名神學博
 士。一八九九年—一九〇二年には “Rochester” 神學に學ぶ。一九一七年には “Columbia” 大學より
 M. A. を授與された。米國南部バプティスト教會の牧師となり、宣教師として一九〇二年—二十二年まで
 支那にゐた。一九一四年來は “Chinese Recorder” の編輯長となつてゐる。また上海工部局支那研究會
 長を五ヶ年間務めてゐた。主なる著書は “Life of Christ” (支那語)。“Chinese Idea of the Supreme

Being” “Naturalization of Christianity in China” “Western Money and Chinese Church. “Revolution
 and Religion in Modern China” 等がある。

ローレンス【Laurens, Rene】佛國人。新聞記者。パリーの「ソワール」紙通信員として上海に駐在、傍
 ら同市佛字新聞「シユルナル・ド・シャンガイ」の副主筆を兼任してゐる。

ローレンソ【Louranco, João】ブラジル人。新聞記者。一八九三年生。大學經濟科卒業。新聞記者となり
 經濟學を研究、一九三三年モンテヴィデオ汎米經濟會議にブラジル代表として出席。日本の財政經濟及
 び移民問題に精通し論評を寄稿。

ロイド【Lloyd, George T.】英國人。ジャーナリスト。英國南ウエルズ、カーマーセンに生る。學校卒業
 後新聞記者となる。一九〇四年渡支、香港に於て「サウス・チャイナ・モーニング・ポスト」紙主筆。
 「ホンコン・テレグラフ」紙編輯顧問、「シャンハイ・タイムズ」主筆、一九二六—三〇年「シャンハ
 イ・マーキュリー」主筆代理等を経て、「シツピング・レビュー」主筆兼社主。

ロトマン【Lothian, Philip Henry Kerr】英國人。侯爵。一七〇一年授爵第一代目の當主。一八八二年
 四月一八日生。バーミンガムの “Oratory School” を経てオックスフォード・ニューカレッジ卒業後、ト
 ランスヴァール及びオレンヂ・リヴァー植民地參事會事務官、中南アフリカ鐵道委員（一九〇五年—八
 年）トランスヴァール植民地應急委員會書記官等歴任。一九〇九年頃には南阿の “The States” 誌の主幹、
 一九一〇—一六年には “The Round Table” の編輯長の職に在り、一九一八—二十一年には “United
 Newspaper” の Director であつたが、一九三一年には印度省の議會書記官に、一九三二年には印度參政
 權委員會議長等に任ぜられた。日支事變に際し、日本に不利な言論を發表してゐる。

ロス【Rossier, Edm.】瑞西人。政治經濟學者。「ジュネーヴ」大學に於て政治經濟學を修め、フランスに

遊學。國際聯盟會議に際しては極東問題を新聞雜誌等に評論してゐる。また「ローザンヌ」大學の政治學教授となる。

ロシンスキー【Rosinski, Herbert】獨逸人。極東問題の研究家。現在はロンドンに居住してゐる。特に日本に關して専門的に研究してゐる。「Das Japanische Reich」と云ふ著書がある。

ロストホルン【Rosthorn, Arthur Freiherr von】オーストリー人。元駐支公使、大學東洋史學教授。一八五九年生。「ウイーン」大學に政治學を學び、外交官となり歐洲大戰前駐支公使。引退後は「ウイーン」大學支那學教授となる。一九三一年滿洲事變勃發するや、新聞雜誌等に極東問題を論評し親支反日的態度を示した。

ロツジイ【Lozzi, Carlo】伊太利人。著述家。經濟學者にして、極東の政治經濟問題を研究して經濟雜誌「コンメンチョ」、「エコノミア・イタリアーナ」その他に論文を寄稿してゐる。

ロバートソン【Robertson, Douglas】米國人。新聞記者。ニューヨーク・タイムス紙北京特派員として、現在ニュースをカヴァーしてゐる。

ロブンスン【Robinson, Senator Arthur R.】米國人。インディアナ州選出。上院議員。アラスカ防備問題に關し、一九三四年頃日本攻撃を演説に文章に盛んに行つた。其頃米國の週刊誌「Liberty」誌上へ、同上院議員が、「Will Japan Seize Alaska?」なるセンセーショナルな論文を發表し、我が松岡洋氏が之に對する反駁論として、「Japan Faces the World」なる文を矢張り同誌上に寄稿して、一般の興味を惹いたことがある。

ワ

ワータカーン【Vahdakar, Luang Vichit】シャム人。元外交官。フランスに遊學。フランス駐劄シャム公使館書記官等を経て、歸國後外務省禮式局長、文部省美術局長、王室圖書館司書官、勅選議員等に歴任。

ワイル【Wile, Frederic William】米國人。著述家にして新聞通信員及政治問題放送者。一八七三年一月三〇日インディアナ州に生る。ノートルダム大學に學び一九二四年同校語學博士及一九二九年「Urbicus」大學法學博士。一九〇〇—〇一年、ボリア戰爭中ロンドンに在りて「Chicago Record」及「Chicago Daily News」の通信員。一九〇二—〇六年にはベルリンに在りて「London Daily Mail」の支局長。一九〇六—一四年には同地に於ける「New York Times」「Chicago Tribune」等の通信員。世界大戰中は「London Daily Mail」に「German day by day」の題下に獨逸事情を連載。現在は華府に於て「Frederic William Wile Service」を開業してゐる。米國に於てラヂオを以て政治問題を放送したのは彼が最初であつた。主なる著書には「Men Around the Kaiser」(1913)「The Assault」(1916)「Life of Emite Berliner」(一九一六年)等がある。

ワイルズ【Wildes, Harry Emerson】米國人。元慶應大學經濟及び社會學教授。現「フィラデルフィア・フォーラム・マガジン」文藝編輯長。一八九〇年四月三日デラウェア州ミドルトンに生る。一九〇九年フィラデルフィアの専門學校卒業後、一九一三年「ハーヴァート」大學 M. A. 一九二二年「ペンシルヴァニア」大學 M. A. 一九二七年同大學に於て哲學博士號を受く。大學卒業後電話會社に勤めたり、新

聞記者等をしてゐたが、一九二四年——二五年には慶應大學の教授に招聘せられた。その後米國に歸り母校「フィラデルフィア」専門學校の教師となつたが、一九三〇年再び記者生活に戻り一九三四年まで「パブリック・レヂャー」紙の文藝部長になつてゐた。一九三四年以來現職に就てゐる。また、日本、支那・メキシコ等を旅行して社會問題を研究した。主著「Social Current in Japan」(1927)。「Japan in Crisis」(一九三四年この本は社會安寧を害すると日本には輸入禁止となる。但しドイツ語には一九三六年に譯された)。

ワットスン【Watson, H. E.】英國人。新聞記者。「ロンドン」大學卒業後新聞記者となり印度に來てカルカッタ市に發行せられてゐる。印度政廳の代辯機關とも云ふ可き英字新聞「ステイツマン」紙の記者となる。

ワルレー【Walree, E. von.】オランダ人。元外交官。實業家。「アムステルダム」高等商業學校卒業後外務省に入り、一八九五年——一九〇四年に亘り横濱駐在オランダ領事、上海總領事。引退後實業界に入り銀行の重役等になつたが、後北京支那關稅特別會議或はその他の國際通商會議に選ばれて委員となつた。オランダに於ける極東通の第一人者。

追加欄 (五十音不同)

アルキン【Alkin, David】ソ聯人。美術批評家で國立藝術院委員。一九二七年夏我が國で「ソ聯美術展」開催の時、來朝。歸國後數多くの日本藝術論を發表してゐる。

アントーノフ【Antonov】ソ聯人。一九二三年春、始めて、ソ聯の「ロスタ」社(ロシア電報通信社)と、我が東方通信社との間に、通信員交換の際、來朝したことがある。前ウラヂオ政廳總理。

ウオズネセンスキー【Voznesensky】ソ聯人。新聞記者。一九二四年、「ロスタ」通信員として來朝したことがある。滞在わづかに半年で去る。

ウラソーフ【Ulasov, V.】ソ聯人。最近創刊紙「アピアチオンナヤ・ガゼータ」に、「スペイン及び支那における空中戦」を發表。

エリセーフ【Elisev, Sergi】ソ聯人。日本史學研究家。一八九〇年生。舊ロシアの産であるが、早くからフランスに育ち、その國でも教育を受けた人。ペトログラード大學の出身。一九〇八年、フランス政府の第一回日本留學生として來朝。東京帝國大學の文科を卒業。歸國後は、ペトログラード大學で、日本歴史及び日本文學を教へた。ソヴェート革命後、フランスに行き、パリ駐在大使館員として八年間勤務。日本文學に通じ、芭蕉に関する論文も書いた。日本に再來遊したが、現在米國ハーヴァード大學日本歴史科の主任教授。

オール【Oll, Louis】佛國人。新聞記者。官吏として長く佛領印度支那に在つた。歸佛後新聞記者となる。現在、「プチ・パリジャン」紙及び「ル・ジュール」紙の特派員として東京に居る。「イラストラシオン」誌にも、よく寄稿する。

カーメネワ女史【Kameneva, O.D.】ソ聯人。先の「對外文化連絡協會」(VOKS)會長。一九二六年四月五日、モスクワの藝術科學院に於て、最初の「日本文學の夕べ」を開催以來、日本藝術及び藝術家の紹介に努力す。一九二九年五月には、「日本との文化連絡」なる一文を、「ラビス」誌上に發表。
ガウツネル【Gauzner】ソ聯人。劇場人。一九二七年、來朝。十月歸國後、「奇妙な日本」なる書を出した。
ガル【Gull, E. M.】英國人。ロンドン支那協會書記長。元「ノース・チャイナ・デイリー・ニュース」紙記者。一九二五年北京關稅會議英國代表專門委員たりし事がある。極東事情に精通し、諸雜誌に論文を發表してゐる。

キム【Kim, Roman. N.】ソ聯人。元は半島人である。先に、日本で慶應義塾普通部に學び後、ロシヤへ入國して現在に及んでゐる。モスクワの東洋大學その他で、日本語を教へる傍ら、日本文學と美術講座を擔當、政治問題も取上げ、ソ聯の御用を勤めてゐる。

キンケード【Kincaido, Zoe】米國婦人。かつて約十年間程、日本に滞在、其間、「ジャパン・アドヴァタイザー」紙並びに「ジャパン・タイムス」紙に關係した。二年前、歸米したが、國際文化振興會の仕事にて、又來京した。日本歌舞伎の研究家として知られてゐる。

クロー【Crow, Carl】米國人。「I Speak for the Chinese」一九三七年、の著がある。

グロースキナ女史【Groskina, Anna】ソ聯人。日本文學研究家。一九二八年、學士院第一回派遣生として來朝。佐々木信綱氏その他に就て、萬葉集を研究した。著書に「ヤマト歌」と云ふ小冊子がある。「清水浪子」といふ日本名を有つてゐる。

コロバクチ女史【Kolovakuchi, Eugenia Maximovich Anna】ソ聯人。日本文學研究家。一九二八年、ニングレード東洋學院の日本語科助教として、來朝した。その目的は古典文學の研究にあつた。「稻葉

秋子」といふ日本名を有つてゐる。

コンラード【Konrad, Nikolai Josifovich】ソ聯人。日本語學者。ペトログラード大學の出身。最初はキエフ高等商業學校に教鞭を執つてゐたが、後、ニングレードにある東洋學院に轉じ、日本語科の主任教授をしてゐる。革命前の四年間我が國において語學の研究に専念した。一九二七年の九月にも再び來朝した。東京の帝大に學ぶ。我が國に關する研究文献多く、中でも「伊勢物語」の翻譯などは、その代表的な著述である。エヌ・フェルドマン夫人も、幾多の日本文學書を露譯した。

シツサーマン【Sissermann, Nikolas von】獨逸系ロシア人。ロシア革命後、両親と共にハルビンに行き、後ウィーンに赴き、勉學した。日本及び極東問題に關して塊國の諸新聞に論文を發表する。ハルビンに亡命。
シユヴァリエ【Chevalier, François】佛國人。ジャーナリスト。かつて外交官として、京城の領事をしてゐたが、現在、小林順一郎氏主宰の對佛關係會社に勤務すると共に、「タン」紙の通信員として、日本關係ニュースをカヴァーしてゐる。

スキターレツツ【Skialez, Stepan Gavrilovich】ソ聯人。文學者。本名は——ペトロフ。一八六九年にウォルガ河畔サマラに生る。一九一七年の革命が勃發すると、チタからハルビンに出で、一九二三年七月日本へも來た。そして日本印象記を東京朝日新聞紙上に連載した。

スレバツク【Stepak】ソ聯人。新聞記者。一八九二年、白ロシヤに生れ、母國の中學を卒業すると、直ちにアメリカに行き、勞働した。革命に際し歸國し、再び渡米してカナダに滞在。一九二〇年ウラヂオに歸り、樺太「サハリンスキー・ウェストニク」紙の編輯長となる。その後二三の新聞を編輯し、極東共和國が出現後、チタに「ダリア」通信社を創立。一九二二年十月「ロスタ」通信員として北京に派遣され、二二年四月ウォズネセンスキーの後を享けて、東京支社に轉じた。それから一旦本國に歸り、二

七年十二月、上海特派員として赴任した。

タイギン【Taisin, I.】ソ聯人。一九三〇年に、「ノイウイ・ミール」誌上に、日本印象記「日本のシルネット」を連載した。

ツレチヤコフ【Ttechakov, Sergei】ソ聯人。文學者。彼は、印刷職工から身を起す。一九一九年に詩集「鐵の蜘蛛の巢」を上梓。革命後、歐羅巴ロシアへ進出、中堅作家として認めらる。劇曲「吼える支那」がある。これはもと長詩として發表されたものだが、後にはドラマ化され、イギリスその他の國々で脚光を浴びた。我が國でも、築地小劇場の俳優達によつて、本郷座で上演された。二五年八月—九月のこと。

テルノフスカヤ女史【Telnovskaya】ソ聯人。一九〇二年、ヤクーツク縣に生れ、ウラヂオの東洋學院に在學中、來朝せし事がある。日本文學研究家で日本現代小説を露譯してゐる。

トドロキーツチ【Todorovich, D. N.】語學教師。一八七六年ユーゴ・スラヴィヤに生る。一九〇九年、東京外國語學校講師として赴任（その前には陸軍士官學校にも奉職）以來、實に二十七年間孜孜として教鞭をとり、この間、彼の門下生として巢立てる者は六七百人に及んでゐる。親日家で、しばしば我が國狀を祖國の新聞に寄稿して居る。

ドクトール【Docteur】佛國人。豫備海軍中將で、「マタン」紙理事會會長である。數回我國をも訪れた事があり、親日家で「マタン」紙及び「ルヴェ・ド・ドウモンド」誌上、日本に好意ある文章を再三發表した。

トムソン【Thompson, Virginia】米國人。學者。佛領印度支那の、行政・文化・産業等に關する研究書“French Indo-China”を一九三七年に出してゐる。

トムソン【Thomson, H. C.】英國人。支那に長く滞在した。“Care for China”なる著書がある。

ナーギ【Nagy】ソ聯人。新聞記者。ソ聯國營通信タス東京通信員として、最近迄東京に駐在し、先般歸國した。日本に悪意ある通信を再三出し、各方面に於て好感を持たれてゐない。

ノウイコフ・フリボイ【Novikov, Privoi, A. S.】ソ聯人。小説家。一八七七年に農民の子として生る。ソヴェート革命直後には、中間的立場にある「クーズニャ」派に所屬してゐた。一九三一年の四月には、モスクワ作家同盟の首腦者になる。一九三三年の春、例の日本海大海戦から取材した小説「ツシマ」を發表。

パウレンコ【Paulenko, Peter】ソ聯人。小説家。對日國防充實宣傳小説「極東に」を發表して有名となる。**バック**【Buck, J. Lossing】米國人。學者。支那に長く滞在。有名なる小説家のパール・バック夫人と共に南京大學に教鞭を取つてゐた。支那農村經濟の造詣深く、これに關する論文が多い。その著「支那農家經濟研究」は有名である。前記夫人とは既に離婚してゐる。

バリモント【Balmonte, Constantine】ソ聯人。詩人。一九一六年五月來朝。約二週間滞在して歸國。歸國後は大いに日本を讚美し、詩に、散文に、また講演に、我が國民の崇高な精神と明媚な風光を紹介した。革命後はヨーロッパに行つた。現在もパリに居住。

ピリニヤーク【Pirniak, Boris Andreivich】ソ聯人。小説家。本姓は—ウオガウ。一八九四年にモスクワ縣のモヂャイスカに生る。中學、實業學校を経て、モスクワの高等商業學校に學ぶ。一九二六年三月、來朝。「東京朝日新聞」に長文日本印象記を連載した。三二年五月再び來遊し、一方、ロシアで「日本の日のもと」及び「石と根」と題する印象記を出版。

プーニン【Punin, Nikolai】ソ聯人。レニングラード美術學校教授。一九二七年五月ソ聯美術代表者とし

て來朝。歸國後、雜誌「ジーズニ・イスクリストワ」に、「日本におけるソヴェート美術展」なる一文を發表。

フィッツジジエラルド [Fitzgerald, C. P.] 米國人。近著 "China: A Short Cultural History" 一九三八年、がある。

プシコフ [Pushkov, Voleri] ソ聯人。文學者。一九一七年、日本を訪れた。後メキシコに渡航し、アメリカ及びドイツを経て歸國した。日本から取材したドラマを發表してゐる。

プレットネル [Pleiner] ソ聯人。學者。モスクワ東洋學院教授。東京帝大に學ぶ。故芥川龍之介氏の小説「秋」を露譯。また日本農村の研究者。

ペトロフ [Petrov, A. N.] ソ聯人。學者。一九二七年の夏、プリボイ書店から、「日本の無産階級」なる著書を上梓。

ベルトラム [Bertram, James M.] 新西蘭人。"First Act in China" 一九三八年、の著がある。

ペンリントン夫人 [Mrs. Penlington] 米國人。キンケード (Kincaid, Zoe) の項参照。

ポズドネーフ [Pozdnev, Dinitry] ソ聯人。學者。レニングラード東洋學院教授。ウラジオの東洋學院に教鞭を執つた事もある。我が國に嘗て來朝し、約四ヶ年滞在した。ポズドネーフの、日本に關する著書は多い。日本語で學生用の教科書を作り、また露日對照字典などを著はした。

ポポフ [Popov, Konstantine] ソ聯人。有名な經濟研究家で、特に日本に關して研究してゐる。著作は多いが、就中「日本の技術的經濟的基礎」一九三五年。「日本の經濟」一九三七年、が知られてゐる。

ホワイディング [Whiting, P.] 米國人。新聞記者。現在は "Australian Associated Press" の東京特派員として極東ニュースをカヴァーしてゐる。數年前ジャパントタイムス社に關係した事もある。

ビルンシュテイン [Rubinstein, Lev] ソ聯人。赤軍所屬の文筆家。問題の小説「サムライの道」が、一九三四年一月發行の雜誌スナーミヤに掲載されるや、彼は一躍してソヴェート文壇の寵兒となつた。

レイテス [Leyes, A.] ソ聯人。日本及びその他の國々の文學批評をしてゐる。特に戰爭文學の批評が得意である。一九三四年二月の「ソヴェートスコエ・イスクリストウォ」紙上で、我が國の福永恭助、故平田晋策二氏の小説を攻撃したのを手始めに斯くの如き排日文章が多い。

レイフェルト [Leifert, E.] ソ聯人。最初は、工業家たらんとして、レニングラード大學に入學、間もなく軍籍に身を投じ、歐洲大戰には少壯士官として各地に轉戦、革命後、ウラジオの東洋學院で日本語を學び、更にレニングラード大學に入學して、日本文學を専攻。既に日本小説を幾度か露譯してゐる。

レオノフ [Leonov, Leonid] ソ聯人。小説家。一八九九年にモスコワで生れた。父は——ジャーナリスト。多くの詩作をした。一九三五年に「ノーウイ・ミール」誌上に發表した小説「太平洋への道」は、日本をはじめ、東方諸國をもテーマとしたものである。

ロスコー [Roscoe, Norman K.] 英國人。東京英國大使館書記生として十數年日本に居た、歸國後在英日本大使館囑託として働いてゐるが、目下は、英外務省囑託となつてゐる。日本事情通として、ラヂオ放送、乃至雜誌に寄稿してゐる。

ロム [Rom, Vladimir] ソ聯人。新聞記者。一九二七年一〇月、「タス」通信社特派員として東京に來る。スレパツクの後任である。ゴリバ夫人は、例のメイエルホルド座の座付女優であつたところから、日本の新劇研究を志してゐるが、間もなく歸國した。

ロラン [Rolin, Henri] 佛國人。新聞記者。「タン」紙のロシア係として知られてゐる。ロシア語に通曉し露支問題、白系ロシア人問題に關して造詣が深い。

ワーナー【Warner, Landon】米國人。文化的に、日本及び支那を研究し、各方面に執筆してゐる。博覽會に關する要務を帯びて來朝、現在東京に來てゐる。

ワシリーエフ【Vasiliev, Georgi】ソ聯人。映畫人。一八九九年生。一九二九年より映畫監督の仕事に就き、弟セルゲー（一九〇〇年生）と共に「眠れる美人」、「自分の顔」、「チャパーエフ」その他を製作。また四年前から、やはり兄弟協力の下に、自ら極東視察後、排日宣傳映畫を作らんとしつゝある由である。

スタイニルベル・オベルリン【Steinlber, Oberlin, E.】獨逸人。日本に於ける佛教各宗派を研究した著書「The Buddhist Sects of Japan」一九二八年、がある。

ドナルド【Donald, William Henry】濠洲人。一八七五年生。父は濠洲知名の政治家。父の所有した地方新聞社で新聞記者としての勉強を積んだ。後シドネイの「デイリー・テレグラフ」紙に入った。日露戦争當時は、香港の「チャイナ・メール」記者として働らき、後編輯長となる。「紐育ヘラルド・トリビューン」紙の通信員、ロンドン・タイムス紙の通信員を兼ねた事がある。後「ファー・イースタン・レビュー誌」にも關係したが、やがて之を辭して國民政府の依頼に依り、北京に經濟情報局を創設して、支那の宣傳援助をした。張學良、蔣介石を始め、支那要人連と親交あり、極めて親支的、且つ排日傾向ある人物である。張學良の西安クーデター事件に際會して、蔣介石救出のために働いた。現在の支那事變では、南京政府側の黒幕となつて活動してゐる事は、既に人の知る所である。

メタクサ夫人【Metaxas, Mrs.】ギリシヤ人。女史はロシアの大地主だったが革命で土地を沒收され、大正十年日本へ亡命、早大、外語等で文豪アナトール・フランスなど造詣深い佛文學を講義して學生の人氣を博し、昭和六年郷里アテネへ歸り七年間老後の靜養につとめてゐたが、滿洲事變にも今度の事變に

も老體に鞭打つて日本の正しい立場を理解させるためにアテネその他で數十回の講演をした。昭和十三年四月再度、日本の土に骨を埋める決心にて來朝した。夫人の前夫君は、詩人前田鐵之助（春聲）氏である。

昭和十三年五月十五日印刷
昭和十三年五月二十日發行

定價 ¥ 1.50 (外地
¥ 1.65)

3 ◯タイムス版 日本及極東を論評する
外国人便覽



編纂兼 國際事情研究會
發行者 代表者 小野 俊一
印刷者 谷 口 能 之 助
東京市麹町區土手三番町二九
印刷所 タイムス出版社印刷所

發行所 株式 會社 タイムス出版社 東京市麹町區有樂町二ノ四
(ジヤパンタイムス出版部標承) 振替東京六〇〇三一番
電話銀座三四一二番

タイムス版小辭典

松田衛著	鷺尾猛著	小出直三郎著	米國政府選定 タイムス編輯部編	イ・ア・ワシリエフ著 金田常三郎編	タイムス出版社編輯部編	松村寛著	タイムス出版社編輯部編	國際事情研究會編
露西亞語基礎單語四〇〇〇	佛蘭西語基礎單語四〇〇〇	獨逸語基礎單語四〇〇〇	英語基礎單語四〇〇〇	露西亞語動詞圖解辭典	露西亞語略語新語辭典	對英照現代米語小辭典	中國及滿洲國地名名便覽	現代國際人名辭典
送價	送價	送價	送價	送價	送價	送價	送價	送價
一、二九〇	一、二九〇	一、一五四	一、一四〇	三、一五〇	二、一〇〇	一、〇九〇	一、〇〇〇	二、一五四

GL
NO. 19818

